

MfG_J_Western_Regions_and_China

目次

1. 長岡とシルクロードの関わり

- (1) 撰田屋関連を含め、なんと、十一項目
- (2) 堀口家、秋山家、前田家との関わり

おのおのの話題の詳細については、「ガイドからのメッセージ」で説明しています。ここでは項目と補足のみ、示します。

2. 気になる話題 東漸と西漸

- (1) 仏教の東漸と西漸
- (2) The teaching of Buddha

インド仏教から中国仏教への変質と、仏典の翻訳僧の活動の間に、大きな関連があるのだな、と感じています。

もちろん、仏教のほかに、さまざまな文化・習慣が、行き交ったはずです。その中で、敦煌の塑像、石窟、十二支、野菜について、いろいろな情報を掲げました。

なぜ十二支野菜か、については、長岡野菜のいくつかが、戦争派兵や中国生活
なぜ野菜か、については、長岡野菜のいくつかが、戦争派兵や中国生活
から持ち帰ったもので、西域由来のものもあることから、気になっていました。

3. 敦煌の塑像

- (1) 水野敬三郎先生の文
- (2) 石窟の歴史

4. Dragon(ドラゴン)とは、全く別物

5. お地藏さん、お稲荷さん

6. 果物、野菜の故郷

参考 中国王朝と読み方

1. 長岡とシルクロードの関わり

不思議なほど多くの、さまざまな関わりがあります。

(1) 摂田屋関連を含め、なんと、十一項目

まず、摂田屋で三つ。山古志関連を含めると、広域摂田屋として五つの話題。

① シルクロードの塑像顔料と古墳壁画、さらに饅絵顔料への繋がり。
饅絵の制作方法、顔料の由来。

② サフラン酒の共通テーマ、龍
ある研究者によれば、38頭の龍がいるとのこと。

③ 地藏菩薩

摂田屋の近くでは、前川町の前川神社に六地藏、摂田屋の入口(越のむらさきさんの前)、そして村松町の北のはずれに道端の地藏を、見ることができます。

地藏の起源は古代インドにあるようで西域を経て日本に来て、はじめ修行僧の形をとるのが普通であったが、道祖神、子供の守護神となったという説があります。

山古志関連で、

④ 鯉の原産地は、黒海・カスピ海沿岸の中央アジアと中国とされる。
オーストラリア・ドイツで、革鯉・鏡鯉として固定され、1904年
はじめて日本にも入ってきて。錦鯉の改良に貢献。

⑤ 西域起源のアルパカと山古志

ラクダ科の生物は約4500万年前、現在の北米大陸に現れ、分化。
2～300万年前に初めてアジアに現れ、いわゆるラクダ(駱駝)として、
西アジア原産のヒトコブと、中央アジア原産のフタコブの2種が現存。
時期は明らかでないがパナマ地峡の形成とともに南アメリカ大陸にも
渡り、ラマ、アルパカに分化。

摂田屋以外で、七つ

①平山郁夫とシルクロード

平山画伯の仏教伝来、シルクロードの文化財

保護活動（日中韓）の原点ともいえる

シリーズ初期大作二点が、駒形十吉美術館に所蔵されています。

「塵耀のトルキスタン遺跡」第14回院展 1970年

「中亜熱鬧図」 第15回院展 1971年

②秋山光和と堀口九萬一、前田青邨との縁

前田青邨画伯 シルクロード文化東漸のシンボルともいえる、法隆寺

金堂壁画の再現模写や高松塚古墳壁画の模写

秋山光和・ペリオ敦煌文書の再発見研究

③松岡譲の「敦煌物語」

文化史的小説～ 羽田亨ら京都学派のアジア史、西域史研究

④半藤さんとのつながり、河井記念館・「峠」とのつながりで、

司馬遼太郎さんは、小説「空海の風景」、随筆「絲綢之路、民族の
十字路」他多くのシルクロードに関する小説、随筆を残しています。

県立近代美術館関連

⑤ あの中宮寺の国宝「菩薩半跏像」が、長岡に(2010年)。会期中は

一時間待ちが当たり前、近美過去最大の入場者数の企画展でした。

弥勒菩薩の故郷は、中央アジア、西アジア。 中国、朝鮮半島

(韓国の国宝78号、83号の弥勒菩薩)を経て日本へ。

⑥秋山光和との縁で、水野敬三郎先生(初代近美館長)。

日本美術史、中央アジアの仏像研究。

⑦ 加山又造「月と駱駝」。駒形美術館の「倣北宋絵画」。

北京の中央美術学院で数回に渡り、日本画を講義。

2. 気になる話題

以下の文は、出典をメモし忘れていたので、明示できないのが申し訳ありませんが、ここに掲げさせていただきます。

実は、最近、駒沢大学仏教学部教授の石井公成さんの「東アジア仏教史」という本を読みまして、「東漸と西漸」について、同じような趣旨の記述がありました(序章)。その後の章においても、西域と中国の間の相互交流、西域諸国やインドの様々な宗教との混淆による仏教の変容が述べられており、インド仏教から中国仏教への変質、多くの民族の文化の影響と仏典の翻訳僧の活動の間に、大きな関連があるのだな、と感じています。

もちろん、仏教のほかに、さまざまな文化・習慣が、行き交ったはずですが。ここでは、その内、石窟、十二支、野菜について、いくつか情報を掲げました。

(1) 仏教の東漸と西漸

阿弥陀仏像と観音菩薩像は中国で制作された。その後西域に西漸した。このように書くと驚く人もいるだろう。仏教はインドから中国へ伝えられた。ガンダーラなどの西北インドも含めてインドを考えれば、仏教は東漸したといえる。しかし、阿弥陀如来像や観音菩薩像などの大乘の仏像に関する限り、少し異なった動きをしているように思われる。

仏像はガンダーラやマトゥーラでつくられ始めた。一世紀に入った頃である。丁度大乘仏教もこの時期に興起した。しかし、大乘仏教の興起と仏像制作の始まりとは無関係である。仏像と大乘仏教は中国で結びついた。

中国では初めから大乘仏教が優勢であったのではない。鳩摩羅什が、401年に後秦の姚興に迎えられて長安に入るまでは小乗仏教も優勢であった。鳩摩羅什の入京を待っていた道安などは小乗仏教に傾いていた。大乘仏教が中国で主流となったのは、鳩摩羅什の訳業に負うところが大きい。鳩摩羅什が般若經典などの大乘の諸經典にとどまらず、龍樹の『中論』や『十二門論』などの論書も訳している。また、阿弥陀経に深い理解を示していた。その後、天台智顛が出て、大乘仏教化は決定的となった。

西域の仏教は、大乘仏教一色になっていたのではない。西域南道のホータンなどでは大乘が優勢であったが、西域北道(天山南路)のクチャあたりでは小乗仏教が主流であった。玄奘の『大唐西域記』や寺院の遺跡から判断できる。これらの地域に仏教が伝わった頃はクシヤン朝において小乗の部派仏教が主流であった。

大乘仏教の登場と発展はミステリアスである。龍樹の竜宮伝説、世親の伝説、華嚴経の伝説などは大乘の経典について不思議な記述をしている。経典が龍宮に隠されていたというのである。龍樹の登場の意味はそれまで成立していた大乘の初期の経典と大乘仏教に市民権を与えたことである。龍樹が登場しなければ大乘仏教の運動は日の目を見なかったかもしれない。

世親の伝説にしても、中期の大乘仏教も難産を強いられたようである。世親の出身は説一切有部である。やはり、大乘の経典は隠されていた、といえる。とにかく世親の登場で中期の大乘仏教典も日の目を見ることができ、ここにようやく大乘は小乗と午並ぶ存在となったのである。

(2) The teaching of Buddha ~central_asia_the east transfer

1) Central Aasia

It was through the Central Asian countries that China came to learn of Buddhism for the first time. Therefore, to tell of the teaching spreading from India to China, it is necessary to speak of the Silk Road. This road passed through the boundless territories in Central Asia to connect the West and the East, and it was during the age of King Wu of the Han dynasty (reigning: 140–87 B.C.) that this trade route was opened. At that time, the domain of Han extended far westward, and in such adjoining countries as Ferghana, Sogdiana, Tukhara and even Parthia, the spirit of mercantilism which had formerly been inspired by Alexander the Great was still vigorously active. Along this ancient route that ran through these countries silk played the most important role, hence the name Silk Road. From the time a little before or after the beginning of the Christian Era. India and China started their cultural contacts first by means of the trade route. Thus, the road can be said to have been the route for Buddhism as well.

2) China

The history of Chinese Buddhism starts from their acceptance of the Buddhist scriptures and translation thereof. From the time to the time of the Northern Sung Dynasty (960—1129 A.D.), the translation work continued for nearly one thousand years.

During the earlier years, those who played pivotal roles in the introduction of the scriptures and in making translations thereof were mostly the priests from the Central Asian countries.

And when Kumarajiva, who came from Kucha, appeared in the early part of the fifth century, the translation work in China reached a high point.

From about that time priests began visiting India from China to learn Sanskrit.

These priests visited India by themselves to learn Sanskrit and brought home those scriptures they had chosen, playing the leading role in the scriptures translation work. The linguistic ability that Hsuan—Chuang showed was especially outstanding, and by

his energetic work, the translation of the scriptures in China reached another peak. The works of the former days done by those represented by Kumarajiva are called "the old Translations" and the works by Hsuan—Chuang and the later translators are called "the New Translations" by Buddhist scholars in later periods.

3) Japan

The history of Buddhism in Japan began in the sixth century. In 538 AD., the King of Kudara, Korea dispatched his envoy to present Buddhist image and scroll of sutras to the Imperial Court of Emperor Kinmei. This marked the first introduction of Buddhism into this country.

In this long history, we can think of Japanese Buddhism in connection with three foci.

The first can be placed on the Buddhism of roughly the seventh and eighth centuries.

The second of the foci can be placed on the Buddhism of the twelfth and thirteenth centuries.

There appeared such great priests as Honen(1133–1212AD.), Shinran(1173–1262AD.), Dogen(1200–1253AD.) and Nichiren(1222–1282AD.).

When we talk of the Buddhism of Japan we can not do without mentioning the names of these great priests.

Why then did only those centuries in question produce such outstanding men?

It is because of the fact that a common problem was facing them all at that time. What was this common problem, then?

Perhaps it was the fact that Buddhism was being accepted, but in a unique Japanese way.

And now the third of the foci is starting.

3. 敦煌の塑像

出典をメモし忘れていたので、明示できないのが申し訳ありませんが、ここに掲げさせていただきます。

(1) 水野敬三郎先生の文

敦煌の石窟内に礼拝対象としてまつられる、あるいは石窟内を荘厳する立体的仏像は、いずれも塑像である。いま莫高窟に残る塑像は大小あわせて二千数百体に上るといふ。もっとも古いものは北涼時代五世紀前半に遡り、以後元時代十四世紀に至るまでの各時代にわたって石窟が開かれるに伴ない、塑像が造り続けられてきた。これらの塑像は中国彫塑史の一面をよくうかがわせるものであると同時に、西域に接し、かつ早く紀元前二世紀に漢帝国の支配下に入って以来、住民の多くは漢民族が占めたという地理的歴史的條件を反映して、敦煌独自の展開を示している。

中国の石窟でも山西省の雲岡石窟や河南省の龍門石窟などは石窟内に石仏を彫り出しているのに対し、ここにもっぱら塑像が造られたのは、敦煌の石窟が脆い礫岩の層に彫られ、その石質が仏像を彫り出すのに適さなかったためで、そのことは敦煌を含む甘粛省の石窟に共通している。ここには塑像の技法と莫高窟における塑像の展開について概略を述べる。

一、敦煌塑像の技法

仏教美術における塑像の技法は、ガンダーラ後期の美術に発する。パキスタンのタキシラやアフガニスタンのハッダの寺院を飾っていた塑像は、小石まじりの粗い土で像の概形を造り、石灰を混ぜた細土、つまり漆喰で表面を固めて仕上げた、いわゆるストゥツコの技法によっている。仏教が東漸すると、乾燥した砂漠地帯で木材にも良質の石材にも乏しい西域で、土を素材とするこの塑像が盛行したのは当然である。シルクロードの両道・北道に沿ったオアシス都市の、土を固めて造った寺院の堂塔に塑像の仏像がまつられた。クチャのキジルやクムトラなど、北道沿いに開かれた石窟寺院でも同様である。西域の塑像でも一部にはガンダーラ式のストゥツコが見られる。

しかし多く用いられた技法は、芦の束などを心にして、これに切藁や植物繊維、獣毛などを萌(すさ=土の割れを防ぐために入れるつなぎ)として混ぜた粘土を盛って塑形し、その上に細かい植物繊維を入れた細土を薄く盛り上げて形を整え、さらに薄く漆喰をかけて仕上げるものである。

敦煌塑像の技法は、このような西域塑像の技法を受けついでのものである。敦煌塑像は形の上からいうと、像の全体、あるいは休部以下の背面を

平らな壁面に密着させた、彫刻でいう浮彫り風の塑像と、立体として独立した丸彫り風の塑像に分けられる。初期の北涼時代から隋時代までの塑像はすべてガンダーラ以来の伝統である浮彫り式に属し、丸彫り式が行われるようになるのは唐時代からである。浮彫り式のうちの後述する型抜きした薄肉の小像と高さ数十メートルに及ぶ巨大な像を除けば、ふつうは次のような遣り方である。頭体の中心を縦に通る心木(皮つきの丸太、後には角材も用いる)のまわりに、芦葦(ろうえ＝現地産の一種の芦)、唐代以降には笈笈草(きゅうきゅうそう＝ゴビ砂漠に生える)を束ねて縄でしばり、肩の高さでこれに直交する木を取り付け、腕や脚部にも芦葦をまわりに沿わせた木、あるいは芦葦を束ねたものを心とする。小像の場合には頭体の心も芦葦の束だけでよい。また浮彫り風の像の場合には壁面に打込んだ木でこれを固定する。この心にまず草泥と呼ばれる藁萌入りの塑土(粘土と砂の混合)を盛りつけて像の概形を造り、これに麻泥と呼ばれる麻の繊維を萌として入れた塑土をつけて塑形し、さらに萌なしの細かい塑土を薄くかけて仕上げる。この仕上土には、西域の塑像とちがって石灰は入れてないらしい。また中庸以降は芦の実の繊毛を入れた細砂泥(錦花泥)が用いられるという。

唐代以後の、小型の丸彫り風塑像の場合には、木で概形を造って塑土を盛った木心塑像もある。また北涼から北周に至る初期の窟では、供養菩薩、飛天、千仏などの小像を、雌型に土を入れて多数造り、壁面に貼って荘嚴することが行われた。影塑と呼ばれるものである。この場合にも前述の三層の塑土が用いられていることは今回出陳の影塑にも確かめられる。型抜きの技法は、北魏の二四八、二五一、二五七の諸窟の塑像の顔にも見られることが指摘されている。

型による造像はガンダーラや西域の塑像でも盛んに行われていた。シオルチュクから塑像のための雌型が数多く発見されており、そこでは頭部から造り、これらをさまざまにだけでなく、胴部、脚部、腕などをそれぞれ別の型組合わせて変化ある像形を造り出していた。影塑や北魏窟の型取り塑像も、このような西域塑像の風をつぐものである。塑土は草泥や麻泥を加えた三層構造にするのが基本であるが、それは各層の収縮度と強度の異なる割合の塑土が互いに作用しあって、像の保存に役立つことが経験的に知られていたからであろう。

唐代に入れば塑像製作はいよいよ盛んで、孝弘果、張愛見、楊惠之など、

長安・洛陽で活躍した名塑作家の名が画史その他に多く伝えられている。塑像に関する記録で、塑工だけでなく、しばしば彩色画家の名も記しているのは、塑像における彩色の重要性を物語っている。

塑像の技法は七世紀には朝鮮半島、さらに日本にも伝えられ、ことに天平時代八世紀に多くの塑像の名作を生んだ。いま述べた唐代の中原の塑像は残っていないが、その影響は日本にも及んだのであろう。天平塑像では法隆寺五重塔塑像のように木心に泥を巻き、塑土を盛ったもの、新薬師寺十二神将像に確認されるように木骨のまわりに片木(へぎ)を並べて内部を空洞にしたものなど、敦煌塑像と同様の、あるいは構造的に一段と工夫を加えたものがある。塑土については法隆寺五重塔塑像や東大寺戒壇堂四天王像では粃穀(新薬師寺十二神将像では藁萌)を混ぜた荒土、紙萌を入れた中土と仕上土というように、基本的にはやはり三層構造である。

また敦煌塑像に既に見た木心塑像や栃木県大谷石仏のような石胎塑像もある。塑像製作は仏教と共に東アジア各地に広く伝播し、その土地なりのもっとも適した材料を選んで、盛んに製作されたのであるが、敦煌塑像に見る技法は、それらの原点というべきものを示すものであり、また西域塑像と東アジア塑像との中継点であるといえる。

(2) 石窟の歴史

アジャンタ石窟寺院 Ajanta Caves temple

壁画 murals

伽藍の遺構 Remains of temple

古墳の石棺 Sarcophagus of ancient tomb

バーミヤン、Bamiyan

キジール、Kizil sarcophagus 古代ギリシャなどで石棺の大理石。

敦煌、Dunhuang 数週間で歯を除く全人体を食べると信じられた。

雲崗 Yungang 壮麗な装飾が施された棺で、地下に埋められ

龍門 Longmen ないものを指す。古代エジプトでは王の彫像が、

ミーラン Miran (Xinjiang) 古代ローマでは神話が施されることが多い。

インド・アジャンター石窟群の壁画、敦煌市莫高窟の壁画などとともに、アジアの古代仏教絵画を代表する作品の1つであった。

The group of murals in the Golden Hall (Kondo) of Horyu-ji Temple is one of the representative murals in the ancient Buddhist paintings in Asia, together with the murals in Ajanta Caves in India and the murals in Mogao Caves in Dun-huang City in China.

法隆寺壁画についてインドのアジャンター石窟群との類似が説かれることもあるが、上述のような様式的特徴は敦煌莫高窟などの初唐絵画にみられるものである。

The murals of Horyu-ji Temple is sometimes said to resemble those of Ajanta Caves in India, however, the stylistic characters mentioned above are seen in the paintings in early Tang Dynasty in China (618 to 712), such as Mogao Cave in Dunhuang.

中華人民共和国新疆ウイグル自治区クチャキジル石窟第38窟内壁壁画

A statue of Maitreya: No. 38 cave interior wall, Kizil Cave, Kucha Prefecture, Xinjiang Uighur, China; mural

in 日本画の伝統と継承

石に描く

墳墓の壁面に絵を描くことは世界中で行われています。日本でも九州を中心に幾何学模様や大陸の影響を受けたと見られる図柄を描いた古墳時代の墳墓があります。初めは直接石に描いていましたが、やがて、奈良地方で近年発見された高松塚やキトラ古墳のように、漆喰で下地を整えた精緻な絵を描くようになりました。

高松塚古墳壁画西壁女子群像 国宝 7世紀後半～8世紀前半

漆喰の下地を作り、朱・弁柄・黄土・群青・緑青・墨などで彩色されている。

土に描く

土壁に白土などの下地を塗り、その上に描かれた絵を一般に壁画といい、古くから行われてきましたが、日本では通常、寺院などの建造物の壁に描かれているため、絵を保存するということから考えるとよい環境とはいえ、今日まで伝わっている作品はわずかです。今日では、寺院などに壁画として日本画を描くことはほとんどなくなりました。

法隆寺金堂外陣旧壁画第十二号壁

7世紀後半 ～8世紀前半

1949年の法隆寺金堂火災で焼損

租い土壁の上に細かい土を塗り、その上に白土を塗って仕上げた壁面に下描きして彩色している。

4. Dragon(ドラゴン)とは、全く別物

(1) 龍の由来は、インド。

もとは、ヒンドゥー教の神のひとつ、ナーガとされる。〈竜〉と漢訳されたが本来は中国の竜とは異なり、蛇、特にコブラのことである。

蛇神崇拝はすでにインダス文明において存在したと推測される。

アーリヤ人は古来より行われた蛇神崇拝をしだいに受け入れ、半神の一つとみなすようになった。それが古代インドの鬼神として定着し、仏法の八部衆となったらしい。

八部衆は、仏法を守護する八つの神。仏教が流布する以前の古代インドの鬼神、戦闘神、音楽神、動物神などが仏教に帰依し、護法善神となったものである。

そして、八部衆のうちの沙羯羅像(さからぞう)が、龍に相当。

興福寺の沙羯羅像 - 像高153.6cm。頭頂から上半身にかけて蛇が巻き付き、憂いを帯びた少年のような表情に造られている。本像は、経典に説く「竜」に当たる像と考えられている。ただし、興福寺の沙羯羅像を「竜」でなく「摩睺羅伽」に該当するものだとする説もある。二十八部衆には「沙羯羅竜王」の名で登場する。

(2) 龍(竜)とDragon(ドラゴン)とは、全く別物

東洋の「龍」は尊ぶべき存在 The dragon is a Chinese imaginary animal.

三蔵法師の白馬も、白馬を飲み込んだ龍が西海竜王の子供で、その「龍」に菩薩が息を吹きかけ、神通力のある白馬にしたという。

へびの進化形という説もある。脱皮が不死に通じ、へびが不死再生の象徴とされた。

仏教の八部衆のひとつ、沙羯羅像(さからぞう)。

東洋の龍は尊い存在 日本人にとって、「龍」は屢々「龍神」として民話などに登場。

「龍神」は雨をもたらして農耕の実りを豊かにしてくれる有り難い、尊い存在。

そして仏法の守護神として、寺院の守護、装飾に用いられるようになりました。

・中国でも、龍は大いに尊ばれている。

黄河の上流に龍門という急流があり、鯉がその龍門を登り切ると、龍になるという伝説があった。その伝説から、通り抜ければ立身出世ができる関門のことを登龍門(とりのゅうもん)と呼ぶようになった。

(3) 欧米の「Dragon」は退治すべき存在

東洋人の龍に対する尊敬の念とは逆に、西洋人にとっては、Dragon はまことにやっかいなる存在なのです。

そもそも、西洋キリスト教世界の精神的バックボーンである聖書「黙示録」に、天使たちがドラゴンと戦ったという記述があります。英語のドラゴンは、概して邪悪な存在なのです。

一般に、西洋では、ドラゴンとは退治すべき悪意ある存在なのです。

ドラゴンに相当するギリシア語のドラコーンとラテン語のドラコは、いずれもへびを指す言葉であり、古代世界ではドラゴンと蛇(サーペント)は厳密には区別されていなかったそうです。

5. お地蔵さん、お稲荷さん

(1) 六地蔵、道端の地蔵

撰田屋の近くでは、前川町の前川神社に六地蔵、撰田屋の入口(越のむらさきさんの前)、そして村松町の北のはずれに道端の地蔵を、見ることができます。

仏教は、バラモン教の地神で従來說かれていた党天と地天をとり入れて虚空蔵菩薩と地蔵菩薩を設定し、天地創造の仏としたが、インドでは、地蔵信仰として発展しなかったようです。中国でも、唐代以降と云われており、唐時代・9世紀作とされる地蔵菩薩像の凶像(幡)地蔵が、中国・敦煌莫高窟蔵経洞で発見され、フランスのペリオ探検隊により将来されています。

日本における民間信仰では道祖神としての性格を持つと共に、「子供の守り神」として信じられており、よく子供が喜ぶ菓子が供えられています。

日本においては、浄土信仰が普及した平安時代以降、極楽浄土に往生の叶わない衆生は、必ず地獄へ墮ちるものという信仰が強まり、地蔵に対して、地獄における責め苦からの救済を欣求するようになりました。

(2) 稲荷

稲荷の起源は、インドのダーキニーという、裸身で虚空を駆ける魔女で、それが荼枳尼天(だきにてん)という、仏教の神(天)、夜叉の一種となり、日本に伝わって、神仏習合思想において、江戸時代までは十一面観音や聖観音を本地仏とされる神となったという説もあるようです。

以下、山折哲雄さんの「仏教民俗学」講談社学術文庫(1993)より

先祖の墓参りをする visit one's ancestors' grave

敬けん piety, religiousness

救済 affirmative relief

供養する pray for someone's soul

(p109) 1. -8節 先祖崇拜と供養

たたりと鎮魂、供養

先祖の霊にたいする供養をおろそかにするとき、その先祖の霊はかならずや何らかの形で祟りをなすであろう。それが先祖崇拜を支える中心的な観念であった。さきに記した納骨や墓供養の問題がでてくるのも、そのような観念がしだいに強力なものとなっていったからなのである。

こうして、先祖の墓をたて、一定の時期に祭祀と供養をおこなうことが子孫たるものの務めとされ、家内の安全と幸福を約束する道であるとされるようになった。家の永続と子孫の繁栄は先祖の加護によってこそはじめて可能になるということがつよく信じられるようになったのである。

Perpetuity and prosperity (permanence and prosperity) of family, descendant, was believed concretely to be enabled by ancestral protection.

But recently, pray for individuals becomes usual because traditional family style is changed.

心の奥底にのこる先祖への思い

ところが、第二次大戦後になって、古い家族制度が衰え、「家」の観念がしだいに希薄になった。人口が都市に集中し、伝統的な家や村の生活が大きく変貌した。家族の型も両親と子どもからなる核家族の数が増え、追善供養や先祖崇拜のやり方もすこしずつ変化してきたのである。ひとことでいえば、家中心の追善供養から小家族中心、もしくは個人中心の追善供養への傾向が目立つようになった。

しかしインドの仏教では「仏」は悟りを開いた人のことをいい、死者を指す言葉ではなかった。ところがその「仏」が、わが国では死者または死んだ先祖と同じ意味に用いられるようになったのである。われわれが「ホトケサン」というとき、われわれの心のなかには仏・菩薩の姿と先祖の姿が重なって映っているのではないだろうか。

In Indian Buddhism, Buddha didn't mean the person who held realization, and it didn't mean a word to remembering a dead person. However, in Japan, the "Buddha" became having a meaning a dead person or a meaning the ancestors.

だから、われわれが先祖の前にぬかづいて怖れかしこむ気持ちになるのは、仏・菩薩の前で敬虔なきもちになるのと、どこかでつながっているからなのだと思う。

それは仏・ボサツの鏡を通して自分自身の良心と対面するということと同じ事柄なのである。このようにみえてくると、日本人にとっての「先祖」というのは、ちょうど西欧人にとっての「神」に近い存在と考えることができるのではないだろうか。西欧のキリスト教徒は、神の前の平等を説き、神による救済を説くけれども、それとちょうど同じように、われわれ日本人も先祖の前で人間の平等を説き、先祖による救いをひそかに念じてきたのである。

(p110) 1. -9節 地蔵と道祖神
聖家族、観音・不動・地蔵

guardian deity 守護神
guardian 守護者

地蔵菩薩は、子供たちを救う菩薩として愛されてきた。

地蔵ははじめ修行僧の形をとるのが普通であったが、やがて子供のイメージでつくられるようになった。そして地獄に堕ちた子供を極楽浄土に送りどける可愛らしい救済仏へと変身をとげた。

The guardian deity of children has been loved as the Bodhisattva who saved children.

The guardian deity of children generally took form of ascetic practices monks, but it became an image of a child before long.

And it was transformed to pretty relief Buddha bring children to Buddhists' paradise.

(p118) 境界を守る神、

山に行くと、山腹や谷間にあたり寮の河原があたりして、そこに地蔵菩薩がたてられている。地蔵は、この世とあの世の境界に建つ救済神とされていたのである。

A guardian deity of children is usually put up in the hillside and a valley.

The guardian deity of children was considered to be relieving God built on a border of the this world and that world.

地蔵はいつしか、民間にひろく信じられていたサエノカミと同一視されるようになった。

外部の世界から侵入してくる邪霊や悪鬼のたぐいを防ぐため、村の境界に建てられた一種の守り神である。

魔障除けの呪物のようなものであるが、一般にはそれをサエノカミという呼称とならんで、道祖神とよびならわしてきた。

日本書記ではこのような性格をもつ神(サエノカミ) をとくにフナド

(岐)神といっているが、「フナド」というのは道のわかれる地点、すなわち境界という意味である。旅人はこうした地点を通るとき、そこを守るサエノカミに供物を捧げて身の安全を祈った。

のちにこのサエノカミをあらわすのに陰陽石をおいたり、男女二体が結び合う姿をかたどったものをおく風習がひろがった。

そしておそらくこの男女一對の仲のよい形像の連想からであろう、道祖神が縁結びの神として珍重されるようになり、その期待が地蔵菩薩のうえにも求められるようになった。

また平安期には、京都などの都市で疫病が流行すると、その疫病を追い払うために辻々に道祖神を祀って、都市民の生活を守ろうとした。その場合も、道祖神が男女のみだらな姿態でかたどられていた。

中国においては地藏王菩薩と呼ぶ。地藏王菩薩の聖地は、安徽省にある九華山である。これは、新羅の地蔵という僧(696年 - 794年)が、この地にある化城寺に住したことに因むものとされる。安徽省合肥は上海から西域への通過地で、2000年の歴史ある古都。

6. 果物、野菜の故郷

果物の多くと同様、野菜も西アジア、中央アジアだが、アメリカ、アフリカ、ヨーロッパ原産のものも多い。

【やさい】

- ② ホウレンソウ／イラン／イランからアラビア半島、スペインを経てヨーロッパに伝わった。
6世紀に中国へ伝わり、江戸時代に日本に伝わった。
- ④ からし菜／中央アジア／中国を経て日本に伝わった。「本草和名」(918年)に記録がある。
- ⑤ シュンギク／地中海沿岸／15世紀に中国を経て日本に伝わった。
- ⑥ ベニバナ／エチオピア／古代エジプトのミイラを包んでいた布から染料として発見されているほど古くから利用されている。日本へは朝鮮半島を経て6世紀に伝わった。
- ⑦ シソ／ヒマラヤ・ミャンマー・中国／日本への渡来は古く、縄文時代の遺跡からも種子が発見されている。平安時代には栽培の記録もある。
- ⑨ ネギ／中国西部／中国では3,000年以上前から栽培されている。日本では「日本書紀」(720年)に記録がある。
- ⑩ ニンニク／中央アジア／古代エジプトでも利用されていた。日本では「日本書紀」(720年)に記録がある。
- ⑪ トウガン／インド／中国で発達し、平安時代に日本に伝わった。
- ⑫ キュウリ／ヒマラヤ山脈／漢の武帝の時代(紀元前141年から87年)に、張騫が新疆ウイグル自治区から持ちかえった。日本では「倭名類聚抄」(923年から930年)に記録がある。
- ⑭ ナス／インド／原産地はインドの東部が有力。中国を通して日本に伝わった。
東大寺正倉院の文書(750年)に記録がある。
- ⑮ サヤエンドウ／中央アジアから中近東／ギリシャ時代には乾燥豆を食用にした。
日本へは9世紀に伝わった。
- ⑯ ソラマメ／中央アジア・地中海沿岸／ギリシャ時代から栽培され、10世紀に日本に伝わった。
- ⑰ カブ／かぶの原産地は諸説ありますが、地中海沿岸と西アジアのアフガニスタン地域ではないかといわれています。中国では2000年前にはすでに食用されていて、日本には奈良時代に伝わったとされる。春の七草のひとつになっている。
- ⑱ ダイコン／中央アジア／古代エジプトではピラミッドの建設にあたった人たちにタマネギ、ニンニクとともに支給された。日本では「古事記」(712年)に記録がある。
- ⑳ ニンジン／アフガニスタン／12世紀に中国に伝わった。日本には「多識篇」(1631年)に記録がある。

アフリカ原産

- ① マクワウリ／アフリカ／弥生時代にインド経由で日本に伝わった。
- ② スイカ／原産は、熱帯アフリカのサバンナ地帯や砂漠地帯。
熱帯アフリカ／古代エジプトの遺跡の壁画にも残されている。西域から中国を経て
寛永年間(1624年から1644年)に伝わった。

アメリカ、熱帯アメリカ原産

⑬ トウガラシ／熱帯アメリカ／コロンブスが1493年にヨーロッパに伝え、日本へは16世紀に伝わった。トウガラシは急速に世界中に広がりましたが、日本に入ってきた時期は諸説あり、16世紀半ばに鉄砲とともにポルトガル人が伝えた、という説と、17世紀はじめに豊臣秀吉の朝鮮出兵の際、日本に持ち帰った、とする説が有力のようです。

日本で唐辛子のことを「南蛮」や「高麗胡椒」と呼んだりするのも、このような背景がある。

トウモロコシ corn

1492年、クリストファー・コロンブスがアメリカ大陸を発見した際、現地のカリブ人が栽培していたトウモロコシを持ち帰ったことでヨーロッパに伝わった。

地中海、ヨーロッパ地域原産

- ④ ナツメ／ヨーロッパ南部・アジア南部／中国を経て日本に伝わった。「万葉集」にも記載がある。
- ⑰ 菜の花／ヨーロッパ／ 菜の花は地中海沿岸地方が原産の植物で、日本には弥生時代に中国から渡来したといわれています
- ⑧ コウサイ(香菜)／地中海沿岸／古代エジプトでは薬用とされていた。日本では「延喜式」(967年)に記録がある。セリ科一年草。
- ① フダンソウ／ヨーロッパ南部／紀元前1世紀前から地中海沿岸で利用されていた。日本には、江戸時代に中国から伝わった。初夏から晩秋まで食べられるので、名前がつけられた。さっと熱湯に通して、ゴマ和えやお浸しで食べる。
- ③ キャベツ／ヨーロッパ西部／アレキサンダー大王が兵士に食べさせたことから、ピタゴラスが改良を重ねたと言われている。日本に伝わったのは江戸時代の末期。
- ⑩ サクランボ／カスピ海・黒海／ヨーロッパでは紀元前から栽培されている。日本には江戸時代に中国から伝わった。

https://eikaiwa.weblio.jp/column/phrases/natural_english/various-vegetables

vegetable は可算名詞で、ふつう複数形で vegetables と表現されます。

他方、fruit は不可算名詞

green vegetables 青物野菜

fresh vegetables 新鮮な野菜

leafy vegetables 葉物野菜

frozen vegetables 冷凍野菜

root vegetables 根菜

raw vegetables 生の野菜

wild vegetables 山菜

cooked vegetables 調理済み野菜

南瓜	かぼちゃ	pumpkin
キャベツ	きゃべつ	cabbage
胡瓜	きゅうり	cucumber
牛蒡	ごぼう	burdock
胡麻	ごま	sesame
甘藷	さつまいも	sweet potato
馬鈴薯	じゃがいも	potato
サトイモ		taro
生姜	しょうが	ginger
大根	だいこん	(japanese) radish
筍	たけのこ	bamboo shoot
人参	にんじん	carrot
大蒜	にんにく	garlic

唐辛子	とうがらし	red pepper
玉蜀黍	とうもろこし	corn
トマト	とまと	tomato
茄子	なす	eggplant

玉葱	たまねぎ	onion
葱(長ネギ)	ねぎ	Green onions
ピーマン	ピーまん	green pepper
ブロッコリー	ぶろっこりー	broccoli
ホウレン草	ほうれんそう	spinach
シュンギク		crown daisy

茸	きのこ	mushroom
シメジ		shimeji
レタス	れたす	lettuce
白菜		Chinese cabbage、Chinese leaves
キャベツ		cabbage

中国王朝と読み方

多くの漢字は一つの音読みですが、一部の漢字では二つの音読みがあります。「西」の場合、「サイ」は呉音、「セイ」は漢音です。現代北京音は xi1です。1、2、・・・の数字は中国音韻の四声を示し、中国音韻学では1で平声(へいせい---)・2で上声(じょうせい /斜め上り)・3で去声(きょせい V)・4で入声(にゅうせい 斜め下り)をいう。

王朝	Dynasties	時代	Date
夏	Xia Dynasty	約前21世紀-前16世紀	
商(殷)	Shang Dynasty	約前16世紀-前11世紀	
周	Zhou Dynasty	770-476 BC	
	春秋	Spring and Autumn Period	770-476 BC
	戦国	Warring States	475-222 BC
秦	Qin Dynasty	221-207 BC	
漢	Han Dynasty	206 BC-220AD	(han4)
三國	Three Kingdoms		魏 Wei 蜀漢 Shu Han 吳 Wu
西晉	Western Jin Dynasty		
東晉	Eastern Jin Dynasty		
	五胡	Five Tartars	265-316 AD
	十六國	The 16 states	317-420 AD
南北朝	Northern & Southern Dynasties		南朝 Southern Dynasties 北朝 Northern Dynasties 北魏 Northern Wei
隋	Sui Dynasty	581-618 AD	(sui2)
唐	Tang Dynasty	618-907 AD	(tang2)
五代十國	Five Dynasties & Ten Kingdoms		
宋	Sung Dynasty (song4)	北宋 Northern Sung Dynasty	960-1127 AD
		南宋 Southern Sung Dynasty	1127-1279 AD
元	Yuan Dynasty	1271-1368 AD	(yuan2)
明	Ming Dynasty	1368-1644 AD	(ming2)
清	Qing Dynasty	1368-1644 AD	(qing1)
中華民國	Republic of China	1912-1949 AD	
	台湾へ	1949 AD-	
中華人民共和國	People's Republic of China	1949 AD-	